

A MOMENT OF TRUTH

真実の時

苦難のうちにあるパレスチナの人々の

心からの信仰、希望、および愛の言葉



KAIROS PALESTINE 2009

訴えを聞いてください

日本聖公会東京教区主教 植田仁太郎

この文書は、エルサレムに本拠を置く、地元のキリスト教会のすべての指導者が署名して、2009年12月に発表されたものである。「パレスチナ・カイロス文書」と名付けられたのは、1985年「南アフリカ・カイロス文書」というものが発表され、当時の世界に、あらためてアパルトヘイトの現実を訴えるのに、力があつたことにちなんでいる。「カイロス」とは、新約聖書のギリシャ語で、「新しい時」「新しい時代」と訳せることばであり、ただ流れゆく時間というより、神の力が発揮される全く新しい時、との理解が込められている。

本文をお読みいただければ分かるように、すでに60年間に及ぶ、パレスチナの人々の苦難の中からの叫びを、どうか世界の人々よ、聞いて欲しいという切実な声である。その苦難の元凶は、イスラエル国家によるパレスチナの占領であると、あの地のすべてのキリスト教指導者が一致して、明確に指摘している。そして、パレスチナの人々が為さなければならないことは、この占領に抵抗することである、とこれまた明快に述べる。ただし、私たちキリストに従うものは、暴力によって悪に立ち向かうのではなく、愛によって抵抗するのだと呼びかける。そして世界中がそれに呼応して欲しいと訴えている。愛による抵抗は難しいことであるが、私たちの知恵を絞って、たとえば、イスラエルとの商取引・金融のボイコットなどが考えられる。

最後に、文章は、ユダヤ教・イスラム教指導者にも呼びかけ、さらに分裂を繰り返すパレスチナ人指導者たちにも訴えかけている。

私は、人類の知恵と、人々の祈り、多くの連帯の活動によって、パレスチナの苦難を終わらせることができると信じています。私たちは、ベトナム戦争を終わらせたし、南アフリカのアパルトヘイトを終わらせたし、ベルリンの壁を終わらせた経験があります。教会はこれらすべてに深く関わってきました。みなさまの祈りと連帯の活動を願って止みません。

2010年7月26日

パレスチナ・イスラエルの平和のために お祈りくださっている皆様へ

エルサレム教区協働委員会
委員長 司祭 神崎雄二

主の平安をお祈りいたします。

イスラエルとパレスチナの紛争によって、多くの人々が日々殺され、傷つけられていることに心を痛み、心から平和を求めて祈るものでございます。

エルサレム教区協働委員会では、エルサレム教区の人々と共に、正義と平和を求め、交わりを深め、彼らの生の声を皆様に伝える努力をしております。

そんな私たちに、この度、聖地の諸教会の指導者たちから、パレスチナの人々の信仰と希望、愛の言葉が盛り込まれた「カイロス・パレスチナ2009」が送られてまいりました。この文書は、英文で広く世界に広まっているものですが、長文であるため、どうかして皆様にお知らせしなければと思いつつ、いたずらに時を経てしまっておりました。

しかしこの度北関東教区志木聖母教会の山田晃二兄が翻訳してくださり、また興石勇司祭が手を添えて下さいましたので、これを皆様のところにお届けすることが出来る次第です。

イスラエル・パレスチナの情報は、圧倒的に親イスラエ尔的なものが多く私たちの所に届くものですが、このカイロス・パレスチナ文書は、そうしたものと異なり、パレスチナ人キリスト者の生の声と言ってよいものです。パレスチナの現状を正確に知ることが出来る、貴重かつ重要な文書であると信じます。

じっくりとお読みいただき、祈りのための資料としていただければ幸いです。

栄光在主

エルサレム所在の諸教会代表者より

子供たちの叫びが私たちの耳に響きます。

私たちエルサレムにある諸教会の代表者は、今もこの聖地に継続している困難な時代に、わが子らが上げ続けている希望の叫びを聞いてきました。私たちは彼らを助け、彼らの信仰と希望と愛と未来への展望を支持します。私たちはまた、私たちの教会に属する全ての信徒たち、イスラエルおよびパレスチナの指導者たち、国際社会と世界の教会に対し、この聖地において正義と平和と和解の動きが加速されるよう要請いたします。私たちは、わが子らの全てに、自分たちの社会の確立と発展のために、また、愛と信頼と正義と平和な社会の実現のために、効果的に貢献できる力が与えられるよう、神に祈ります。

ギリシャ正教会大司教	テオピロス三世
ラテン教会（ローマ・カトリック）大司教	Fouad Twai
アルメニア正教会大司教	Torkom Manougian
聖地の管理修道会神父	Pierdattista Pizzaballa
コプト教会大司教	Dr. Anba Abraham
シリア正教会大司教	Mar Swerios Malki Murad
マロン派教会大司教	Paul Nabil Sayah
エチオピア正教会大司教	Abba Mathaios
ギリシャ・カトリック教会大司教	Joseph-Jules Zerey
シリアカトリック教会司教	Gregor Peter Malki
ルーテル教会司教	Munib A. Younan
聖公会主教	Suheil Dawani
アルメニア・カトリック教会司教	Raphael Minassian

エルサレム 2009年12月15日

カイロス パレスチナ

本文書は現在パレスチナで起こっていることについて世界に向けて発信されるパレスチナ人キリスト者の言葉です。これは、まさに、私たちがこの地とそこに住む人々の苦しみの中に神の恩寵の栄光を見ることを切に願う、この時に書いたものなのです。本文書は、この精神に立って、国際社会に対し、60年以上にわたる抑圧、住居喪失、苦難、また、露骨なアパルトヘイトに直面しているパレスチナの人々を支持するよう要請いたします。国際社会が沈黙して占領国家イスラエルを傍観しているかぎり、苦難は続きます。私たちの言葉は希望と愛と祈りと神への信仰の叫びなのです。不正義とアパルトヘイトに対抗し、私たちの地域での平和の実現のために働き、私たちに対して為されている犯罪と土地の強奪を正当化する神学を変革するよう求めて、私たちはその言葉を、先ず自らに向け、次いで世界の全ての教会とキリスト者に向けて送るのです。

この歴史的文書の中で、私たちパレスチナ人キリスト者は、私たちの土地を軍事的占領することが神と人道に対する罪であり、占領を正当化するいかなる神学も、キリスト教の教えとは隔たりがあることを宣言いたします。なぜならば、真のキリスト教神学は、抑圧された者との愛と連帯の、また、諸国民の間での正義と平等を呼びかける神学だからです。

本文書は、自然発生的に出来たものではなく、また偶発性の結果でもありません。それは論理的な神学でも政策、方針でもなく、むしろ信仰と働きに関する文書です。その重要性は、パレスチナ人の関心事についての真摯な表明と、私たちが生きている歴史のこの時点に関する考察にあります。それは、大胆かつ明瞭に事柄を表現することによって、預言者的であろうと努めています。それに加え、アル・クッズ(al-Qds = エルサレム)を首都とする独立パレスチナ人国家の樹立によって公正かつ永続する平和を導くという解決案を提示して、イスラエルによるパレスチナ人の土地の占領とあらゆる形の差別の終結に向けて歩を進めています。また本文書は、世界全ての国の国民、政治指導者、国政担当者が、抑圧と国際法の無視をイスラエル政府に止めさせるようイスラエルに圧力をかけ、また、法的処置をとるよう求めています。本文書はまたこの不正義に対する非暴力抵抗運動は、キリスト者を含むパレスチナ人全員にとって権利であり義務であるという明快な立場をとっています。本文書の提唱者たちは、パレスチナ人、アラブ人と国際社会の幅広い人々からなる多くの友人から助言を受けつつ、神への信仰と人々への愛に導かれ、祈りと討議によって、本文書作成に一年以上も携

りました。私たちはこれらの友人たちに、私たちとの連帯のゆえに感謝いたします。パレスチナ人キリスト者として本文書が、世界の平和を愛する諸国民、ことにキリスト者の兄弟姉妹の、努力に転機をもたらすものとなることを願っています。私たちはまた、当時抑圧と占領に対する抗争の武器となった、1985年に公表された南アフリカ・カイロス文書がそうであったように、本文書が積極的に歓迎され、強い支援を受けることを願うものです。私たちは占領からの解放が、その問題が単に政治的なものでなく、人間が撲滅されるということなので、この地域の全ての人々が深い関心を寄せているはずだと思います。

神が、私たち全て、特に私たちの指導者、政策決定者、に正義と平等の方策を見出し、それが私たちの求める真実の平和に向かう唯一の道であることを悟ることができるよう力をお与え下さいますよう祈ります。

感謝をもって

大司教 Michel Sabbah

大司教 Atallah Hanna

Dr. Jamal Khder 師

Dr. Rafiq Khoury 師

Dr. Mitri Raheb 師

Dr. Naim Ateek 師

Dr. Yohana Katanacho 師

Fadi Diab 師

Jiries Khoury 博士

Ceder Duabis 女史

Nora Kort 女史

Lucy Thaljeh 女史

Nidal Abu Zuluf 氏

Yusef Daher 氏

事務局 Rifat kassis 氏

注： パレスチナ・キリスト者組織のリストおよび、本文書ないし他言語への翻訳文に署名した個人名は以下のウェブサイトで見ることが出来る。

www.kairopalestine.ps

真実の時

苦難のうちにあるパレスチナの人々の心からの信仰、希望および愛の言葉

序

パレスチナ・キリスト者の一グループであるわれわれは、祈りと振り返りおよび意見交換を踏まえて、この地の全ての住民に対する神の摂理の内にあって、イスラエルの占領下にあるこの地の苦悩のただ中において、あらゆる希望の喪失の中からの希望の叫び、心からの祈りと絶えることのない神への信仰の叫びをもって、心から要請する。全ての者に対する神の愛の神秘、及び全ての民の歴史、特にわが国の歴史における神の現臨の神秘に力をえてわれわれは、キリスト教信仰とパレスチナ人としての意識に基づいたわれわれの言葉、すなわち、信仰と希望と愛の言葉を宣言する。

なぜ今なのか？

なぜなら、現在われわれパレスチナ人は悲劇の最終段階を迎えているからである。政治指導者はその解決方法を見出すという重大な課題に取り組むことなく、ただ危機に対処することに甘んじている。信仰者の心は、次のような苦悩と疑問にあふれている。国際社会は何をしているのか？ イスラエルの、アラブの、そして、パレスチナの政治指導者は何をしているのか？ 教会は何をしているのか？ 問題は単に政治的なものだけではない。それは、人間を絶滅させる政策なのであって、教会が関心を寄せるべきことがらである。

われわれはこの地における兄弟姉妹、各教会の成員に訴える。われわれは、キリスト者としてまたパレスチナ人として、われわれの宗教と政治の指導者、パレスチナ社会およびイスラエル社会、国際社会、世界の教会のキリスト者兄弟姉妹に訴えるものである。

1. 現場における実態

- 1.1 「彼らは、平和がないのに、『平和、平和』という。」(エレミヤ 6:14)
今日、誰もが中東での平和と平和プロセスを口にする。しかしながら、今までのところそれは単なる言葉にすぎず、現実には、イスラエルによるパレスチナ人の土地の占領であり、われわれの自由の剥奪とこの現在の状況が生み出していることの全てである。

1. 1. 1 パレスチナ領土に建設された分離壁は、パレスチナ人を切り離して狭い区域に分断して、われわれの町や村を監獄と化しているが、そのためにこそ、大部分の土地が没収されたのである。ガザは、特に2008年12月から2009年1月におよぶイスラエルによる残酷な武力攻撃の後、恒久的に封鎖され他のパレスチナ領土から切断され、非人間的な状況下に置かれたままである。
1. 1. 2 イスラエル人入植地は、神の名と武力によって略奪されたわれわれの土地であるが、それが水や農地を含む自然資源を支配し、多数のパレスチナ人を追放し、いかなる政治的な解決をも妨げるのである。
1. 1. 3 仕事や学校、また、病院に行くたびに、軍の検問所を通らなければならないという屈辱を毎日体験するという現実がある。
1. 1. 4 イスラエル人としての身分証明書を、特に配偶者が、持っていないことによって、多数のパレスチナ人家族に分断をもたらし、まともな家族生活を妨げられているという現実がある。
1. 1. 5 信教の自由は厳しく制限されており、聖地への自由な立ち入りは、安全を口実に、許されていない。エルサレムとそこにある数々の聖域には、西岸地区あるいはガザ地区に住むキリスト者やイスラム教徒が立ち入ることのできない場所である。エルサレム居住者であっても、宗教的な祝祭期間中、数々の制約を受ける。われわれアラブ人聖職者の何人かはエルサレムに入ることを全く禁じられている。
1. 1. 6 難民もわれわれの現実の一つである。多くの難民が、いまだにキャンプで困難な暮らしをしている。彼らは何世代にもわたって自分の土地の返還を待ち望んでいる。彼らは今後どうなるのだろうか。
1. 1. 7 囚人たちの生活はどうだろうか。数千にも及ぶ囚人がイスラエルの刑務所で暮らしているというのもわれわれの現実の一つである。イスラエル人は同胞の囚人一人を解放するために手を尽くすが、数千のパレスチナ人の囚人は、いつ自由を得ることができるのだろうか。
1. 1. 8 エルサレムはわれわれの現実の中心であるとともに、われわれの平和の象徴であり、また紛争のしるしである。分離壁はパレスチナ人地域を分断するのに対して、エルサレムではパレスチナ市民やキリスト者、また、イスラム教徒の不在が続いている。彼らの身分証明書は没収されており、エルサレムに居住権を持たないのである。彼らの家は破壊されるか収容されている。和解の街エルサレムは差別と排除の街となり、平和ではなく争いの源となっている。
1. 2 この現実の一部はまた、イスラエル人による国際法と国際規則の無視と、この恥辱に抵抗できないアラブ世界と国際社会の無力である。人権が侵害され、

国内や国際的な人権擁護組織の各種報告にかかわらず、不正義が続いている。

1.2.1 パレスチナ人はイスラエル国家の内において、歴史的にも不正義に苦しめられてきたが、市民であり市民としての権利と義務を持ちながらも、今なお差別政策に苦しんでいる。彼らもまた、国内の他の市民の持つ全ての権利と平等を享受することを待望している。

1.3 外国への移住者がわれわれのもう一つの問題である。平和と自由実現の見通しが全く立たないため、イスラム教とキリスト教のいずれに属する若者も移住を余儀なくさせられている。このようにして、この地域は最も重要で貴重な財産である教育のある若者を喪失している。特にパレスチナにおけるキリスト者数の減少は、この紛争と問題の包括的な解決を見出せず、国内および国際社会に蔓延する無気力という危険な結果の一つである。

1.4 このような現実にもかかわらず、イスラエルは占領とパレスチナ人に対する集団的虐待、また、あらゆる形の報復行為を、自己防衛のためのものとして正当化している。われわれの見解では、それは現実と正反対である。確かに占領に対するパレスチナによる抵抗運動はある。しかし、占領がなければ抵抗運動も、恐怖も、危険もない。これがわれわれの理解する状況である。だからこそわれわれは、イスラエルに対して占領の終結を要求するのである。そうすれば、彼らは恐れも脅威もなく安全と正義と平和に満ちた新しい世界を創出できよう。

1.5 これまで述べてきた現実に対してパレスチナ人は多様な仕方に対処してきた。パレスチナ当局は交渉という手段を公式なものとしているが、それで和平プロセスが進捗することはなかった。ある政党は武力闘争の道を選んだ。しかし、占領を止めさせようとするパレスチナ人の合法的な抵抗運動を、イスラエル人はパレスチナ人がテロリストであると非難する口実として用い、イスラエル人による対テロ戦争として紛争の本質を歪曲したのである。

1.5.1 その悲劇は、パレスチナ人自身の内部抗争とガザ地区の他のパレスチナ人地域から分断によって更に悪化した。分裂はパレスチナ人内部のこととはいえ、2006年の民主的かつ合法的に行われた選挙結果に示されたパレスチナの人々の意思に、国際社会は否定的な態度を示した。国際社会はこのことに重大な責任を負うべきである。

われわれは、これら全ての中で、破局の中で、信仰と希望と愛の言葉であるわれわれキリスト者の言葉を再び繰り返し宣言するものである。

2. 信仰の言葉

われわれは唯一の神、善かつ正義の神を信ずる。

2.1 われわれは世界と人類の創造者である唯一の神を信ずる。われわれは、被造物全てを愛する善かつ正義の神を信ずる。われわれは、全ての人が神の似姿に造られ、全ての人々の尊厳は全能者の尊厳に由来することを信じる。われわれはこの尊厳が個人においても全体においても同一であると信ずる。このことは今、ここで、特にこの地で、闘争や紛争を展開するためではなく、互いに知り合い、愛し合い、愛と相互信頼の地を築くために神がわれわれを造られた、ということの意味する。

2.1.1 われわれはまた、神の永遠の言葉、ひとり子、救い主として神がこの世にお遣わしになったわれわれの主イエス・キリストを信じる。

2.1.2 われわれは、教会と全ての人々の旅路に同伴される聖霊を信じる。それは今ここにおいて旧約と新約とからなる聖書の一体性を示し、われわれがそれを理解する助けとなる霊である。霊は過去、現在、未来にわたって人間に対して神の啓示を明らかにするのである。

われわれは如何に神の言葉を信じるか？

2.2 われわれはここ自分の土地において神が人類にお語りになったこと、すなわち、「神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。神は、この御子を万物の相続者と定め、また、御子によって世界を創造されました。(ヘブライ 1:1-2)」ことを信じる。

2.2.1 われわれパレスチナ人キリスト者は、世界の全てのキリスト者と同じくイエス・キリストは律法と預言を成就するために来られたと信じる。彼はアルファでありオメガであり、初めであり終わりであり、その光と聖霊の導きとによってわれわれは聖書を読み解く。われわれは黙想し、イエス・キリストがエマオにおいて二人の弟子たちにされたように聖書を解釈する。聖ルカの福音書に書かれているように、「そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。」(ルカ 24:27)

2.2.2 われわれの主イエス・キリストは神の国は近いと宣言されるために到来された。彼は全人類の生活と信仰に革命を引き起こした。彼は「新しい教え」(マルコ 1:27)をもって旧約聖書、ならびに、キリスト者の信仰と日常生活に一環する主題、約束と選び、神の選民と土地というような主題に新しい光を投げ

た。われわれは、神の言葉、歴史の各時代に特別な光をあて、キリスト者に対して神が今ここで語られることを明示する、生きた言葉であることを信ずる。したがって、神の言葉を、諸国民やそれぞれの個人の生活における神の愛と摂理を曲解させる、石の文字に変えてしまうことは容認できない。これは、神の言葉が石とされ、死の文字として世代から世代に伝えられることであり、われわれに死と破壊をもたらすまさに聖書原理主義的解釈のもつ誤りである。この死の文字は、自分の土地においてわれわれが持つ権利を剥奪するための武器として、われわれの世代に現実的に用いられているのである。

われわれの土地は普遍的な使命を持っている。

2.3 われわれは自分たちの土地がある普遍的な使命を持つことを信ずる。この普遍性によって、この土地に住む全ての国民だけでなく人類全体が、約束、土地、選び、神の民に含められるのである。聖書の教えによれば、土地の約束は政治的な綱領ではなく、普遍的な救済の序曲なのである。それは地上における神の国の完成の前ぶれである。

2.3.1 神は世界に普遍的な任務を展開するために、族長、預言者、使徒たちをこの地に遣わした。今日われわれはこの地に、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の3宗教を持っている。われわれの土地は、世界の全ての国がそうであるように、神の土地である。神のみが聖であり聖化なさる方なので、その土地は神がそこにいましたもうかぎり聖なるものである。この土地に対する神の意思を尊重することは、そこに住むわれわれの義務である。不正と戦争という悪からこの土地を解放することはわれわれの義務である。それは神の土地なので、和解と平和と愛の土地でなければならない。これは実現可能なことである。神はわたしたちをここに二つの民として配置され、われわれにその意思さえあれば、その地を現実に神の土地とし、共に生き、正義と平和を確立するための能力を神はわれわれにお与えになった「地とそこに住むもの、世界とそこにすむものは、主のもの。」（詩篇 24:1）なのである。

2.3.2 この地において、われわれがパレスチナ人キリスト者とパレスチナ人イスラム教徒として在るのは、偶然ではなく、それぞれの土地に住む他の人々と土地との結び付きと同様に、この土地の歴史と地理に深く根ざしたものである。われわれがそこから追放されたのは不法なことであった。西側諸国は、ヨーロッパの諸国におけるユダヤ人の辛苦を償おうとしてきたが、しかしその償いはわれわれ自身とわれわれの土地でもってなされたのである。彼らは不正を正そうと努力したが、その結果は新しい不正を生み出したのであった。

- 2.3.3 さらに、西側諸国のある神学者たちが、われわれの権利の侵害に対し聖書的かつ神学的な正当性を与えようとしていることをわれわれは知っている。その結果、彼らの解釈によれば、約束は、われわれの存在そのものを脅かすものとなっている。福音書の「良い知らせ」そのものが、われわれにとって「死の前兆」となっている。われわれはこれらの神学者に対し、神の言葉を全ての人々への生命の源と受け止めるようになるため、神の言葉に対する彼らの考察を深め、彼らの解釈を正すよう、求めるものである。
- 2.3.4 われわれのこの土地との結びつきは本来的な権利である。それはただイデオロギーや神学的な問題だけにとどまらない。それは、生と死にかかわる問題である。われわれが自分の土地で自由な民として生きたいという希望を表明するというだけの理由で、われわれに賛同しないばかりでなく、敵としてわれわれを退けさえする人々がいる。われわれは、パレスチナ人であるが故に、われわれの土地を占領されて苦しんでいる。そしてパレスチナ人キリスト者として、神学者たちの誤った解釈のために苦しんでいる。これに抗して、「良い知らせ」をわれわれと全ての人に対する「良い知らせ」とするために、神の言葉を死の源としてではなく、生命の源として守ることが、われわれの果たすべき役割である。われわれパレスチナ人であるキリスト者とイスラム教徒の存在を脅かすために聖書を利用する人々に抗して、神の言葉がわれわれに破滅をもたらしえないことを知っている故に、われわれは自らの信仰を新たにするものである。
- 2.4 それ故、われわれは、不法に基づいた、また、ある個人、もしくは、ある国民によって強要される、政治的な選択や立場を正当化したり支持したりするための聖書の使用はいずれも、宗教を人間のイデオロギーに変え、神の言葉から聖性と普遍性と真実とを剥ぎ取るものであると宣言するものである。
- 2.5 われわれはまたイスラエル人によるパレスチナ人の土地の占領は、神によって与えられたパレスチナ人の基本的人権を蹂躪するものなので、神と人に対する罪であると宣言する。それは、被占領者として生きるパレスチナ人の形をとった神の似姿を歪めるのと同様に、占領者となったイスラエル人の形をとった神の似姿を歪めるのである。われわれは、占領をあたかも聖書と信仰と歴史に基づいているかのように正当化するいかなる神学も、キリスト教の教えとはかけ離れていることを宣言する。それは全能の神の名によって暴力と聖戦を招集し、神をその場凌ぎの人間の興味に従属させ、政治的にも神学的にも不法のもとに置かれた人間の形をとった神の似姿を歪めるものだからである。

3 . 希望

3 . 1 ほんの僅かな肯定的な期待すらないのに、われわれの希望は弱まることがない。現在の状況は、われわれに強要されている占領の早期解決もしくは終焉を約束してはいない。確かに各種の提案、会合、訪問、また交渉などが増えてはいるが、これらのものはわれわれの状況や痛みは何の変化をももたらすことがないままである。その悲劇を終わらせたいという希望の宣言と共にオバマ大統領が発表した新しい米国の立場ですら、われわれの現実に変化を与えることができずにいる。いかなる解決をも拒否するという明確なイスラエルの反応は、肯定的な期待を完全に否定するものである。このような状況にもかかわらず、われわれの希望は、神から来るゆえに、弱まることがない。神のみが善であり、全能であり、愛そのものなのであって、善としての神の特質が、いつの日かわれわれの悪しき状況に打ち勝つであろう。聖パウロが言うように、「もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。だれがキリストの愛からわたしたちを引き離すことができますか。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。『わたしたちは、あなたのために一日中死にさらされ』と書いてあるとおりです。どんな被造物も神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」(ローマ 8 : 31,35,36,39)

希望の意味

3 . 2 われわれのもつ希望は、第一にわれわれの神への信頼であり、第二に状況のいかにかわらず、より良い未来について抱くわれわれの期待である。第三にそれは幻想を追求するのではない、つまり、われわれはすぐに解放が訪れはしないことを実感している。希望とは苦難のさなかにあって神を仰ぎ見る能力であり、われわれの内に住みたもう聖霊の協働者となる能力である。このような見方が、われわれを取り巻く現実を踏みとどまり、確固たる姿勢を持ち、その現実を変革するための力を生ずるのである。希望は、悪に屈服するのではなく、それに立ち向かい抵抗し続けることである。われわれは、現在にも未来にも荒廃と破壊以外の何ものをも見出せずにいる。われわれは、強者の優越、すなわち差別主義的分離とわれわれの存在と尊厳を否定する法律の押しつけを目指す傾向の一層の強化を認識している。われわれはパレスチナ人の地位における混乱と分裂を認識している。これら全てにもかかわらず、もしこの今日の状態に抗して懸命に働かなければ、地平線におぼろげに見える崩壊はわれわれのところには来ないかも知れない。

希望の徴（しるし）

- 3.3 われわれと共にある教会、その指導者および信徒たちは、その弱さと分裂にもかかわらず、ある希望の徴を示している。われわれの地域教会は生き生きとしており、若者の多くは正義と平和のための活動的な使徒である。個人的な参加とは別に、われわれの多様な教会組織は、奉仕、愛および祈りによってわれわれの信仰を活発化し表現している。
- 3.3.1 希望の徴の中には、信仰的で社会的な活動を伴った地域的な神学センターがある。われわれの多様な諸教会、そのようなセンターの数は非常に多い。教会一致の精神は、今のところためらいがちではあるが、異なる教会家族間の集会等を通してますます現れるようになっている。
- 3.3.2 この他に宗教指導者と信徒の一部を含めた他宗教との対話、キリスト教徒とイスラム教徒との対話、のための集会を加えることが出来る。正直なところ、対話は長い過程を必要とし、われわれが同じ苦しみを経験し、同じ期待を持つ者としての日々の努力によって達成されるものである。さらに三つの宗教すなわちユダヤ教、キリスト教、イスラム教の間の対話や、学問あるいは社会レベルの対話のための集会もある。彼らは皆占領によって押しつけられた壁を破壊し、自分の兄弟姉妹の心にある歪められた人間の認識に反対するのである。
- 3.3.3 最も重要な希望の徴の一つは、世代間の結束であり、彼らの大義の正しさへの信頼であり、「NAKBA」（破局）とその重要性を忘れないという記憶の継続性である。同様に大切なことは、世界の多くの教会の間にパレスチナで起きていることへの関心と、その真実を知ろうとする意欲とを拡げることである。
- 3.3.4 さらに、われわれは正義が回復される時には、過去の怨念を乗り越え、和解をするという決意を多くの人々がしていることを知っている。パレスチナ人の政治的権利を回復する必要があるという共通の認識が広がっており、また、これを支持する国際社会の承認によって、平和と正義を主張するユダヤ人とイスラエル人の声が挙げられている。確かに、正義と和解を求めるこれらの勢力は、不正な事態を変化させるには至っていないが、影響力は持っているので苦難の時を短くし、和解の時を早めるであろう。

教会の使命

- 3.4 われわれの教会は祈りを捧げ奉仕する民の教会である。この祈りと奉仕は現在と未来とに神の声を伝える預言的な性格をもっている。われわれの国で起こるあらゆること、その全住人、全ての苦しみと希望、全ての不正とこの不正を止めようとする働きは、われわれの教会の祈りであり、その組織全体の奉仕活動の

一部である。ある人々が、教会を宗教的な経験に閉じこめ、沈黙を守ることを望んでいるという事実にもかかわらず、われわれの教会が不正に反対する声を上げていることを神に感謝するものである。

- 3.4.1 教会の使命は預言者的であり、それぞれの現場と日常的な出来事の中で、神の言葉を勇気と正直、また、愛を持って語ることである。教会は、われわれの主キリストが貧しい人、罪びとの側に立ち、悔い改めと命、誰も剥奪する権利を持たない神によって与えられた尊厳の回復を呼びかけられたように、抑圧された者の側に立つ。
- 3.4.2 教会の使命は神の国、すなわち正義と平和と人間の尊厳を尊重する国、を宣言することである。われわれの生きた教会としての使命は、神の善良さと人間の尊厳の証人であることである。われわれは、人間が自らの尊厳と自分に敵対する者の尊厳とを信じる新しい社会を宣言することが求められる時には祈り、また、声を挙げるために召されている。
- 3.4.3 われわれの教会は、いかなる地上の王国とも結びつきえない王国を指し示す。イエスはピラトの前で自分が本当の王だが「わたしの国は、この世には属していない。」(ヨハネ 18:36)と述べた。聖パウロは言う。「神の国は、飲み食いではなく、聖霊によって与えられる義と平和と喜びなのです」(ローマ 14:17)。したがって、宗教はいかなる不正義な政治制度に賛同したり支持したりすることはできず、むしろ正義と真理および人間の尊厳を推進しなければならない。それは人間が不正に苦しみ、人間の尊厳が侵害されるような体制を浄化すべくあらゆる力を尽くさなければならない。地上における神の国は、いかなる特定の政治システムにも勝って偉大、かつ包括的なものなので、いかなる政治的な路線にも依存することはない。
- 3.4.4 イエス・キリストは言われた。「神の国はあなたがたの間にあるのだ。」(ルカ 17:24)。われわれの間に、われわれの内にある王国とは、救いの秘跡の拡張である。それはわれわれの間に神が現臨するということであり、われわれが語り行うことの全てに臨在される神をわれわれが知覚するということである。この神の臨在のゆえに、われわれは義がこの地域に実現されるまで自分たちにできることを行おうとするのである。
- 3.4.5 パレスチナ人の教会がこれまで生きてきた、そして今も生き続けている極めて決定的な状況は、その信仰を明確にし、その召命をより深く自覚するよう教会に要求してきた。われわれは苦しみと痛みのただ中で、自らの召命を学びそれをより深く自覚するようになった。今、復讐の力よりも愛の力を、死の文化よりも生の文化を身につけている。これが、われわれ、教会、そしてまた、世界

の希望の源である。

- 3.5 復活はわれわれの希望の源である。キリストが死と悪に勝利されたように、われわれにもまた、この土地の住人にも、戦争の悪を打ち負かすことができる。われわれは復活の地であって、証言し、揺らくことない、行動的な教会として生き続けるであろう。

4. 愛

愛の戒め

- 4.1 われわれの主キリストは言われた。「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛しあいなさい。」(ヨハネ 13:34)。主はすでにどのように愛し、どのようにわれわれの敵に向き合うかを示された。「隣人を愛し、敵を憎め。しかし私は言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者になりなさい。」(マタイ 5:43-47)。
- また聖パウロは言った。「だれに対しても悪に悪を返さず。」(ローマ 12:17)。
- また聖ペテロは言った。「悪をもって悪に、侮辱をもって侮辱に報いてはなりません。かえって祝福を祈りなさい。祝福を受け継ぐためにあなたがたは召されたのです。」(ペトロの手紙 - 3:9)。

抵抗

- 4.2 このみ言葉は明瞭である。愛は主キリストのわれわれに対する命令であり、それは友人と敵とのいずれをも含んでいる。これはわれわれがいかなる種類の悪に抵抗せねばならない状況にあっても明快であるはずである。
- 4.2.1 愛は全ての人の中にも神の顔を見ようとする。全ての人々がわれわれの兄弟であり姉妹である。しかしながら、全ての人の中に神の顔を見るということは、相手の悪や不当な攻撃を受け入れることではない。むしろこの愛は悪を正し、不当な攻撃を止めさせようとするのである。
- パレスチナ人に対する不当な攻撃であるイスラエル人の占領は、抵抗を受けるべき悪である。それは抵抗を受け除去されるべき悪であり罪である。このことに対する基本的な責任は占領に苦しむパレスチナ人が決定すべきである。キリスト教の愛は、占領への抵抗運動へとわれわれを招く。しかし、愛は正義の道を歩むことによって悪を終結させる。責任はまた国際社会にもある。それは、現在、国際

法が諸国民の関係を調整するからである。最終的には、責任は不法の実行者にあるのであって、彼らは、自らの内にかかえる悪と他者に強要してきた不法から自らを解放しなければならない。

4.2.2 諸国の歴史を顧みると、われわれはたくさんの戦争と、戦争による戦争に対する抵抗、また暴力による暴力に対する抵抗が数多いことに気付く。パレスチナ人も、特にイスラエル占領に対する闘争の初期には、この諸国民と同じ道を歩んだ。しかし、特に最初のインティファダの期間、平和的な闘争を展開したこともあった。われわれは全ての国民が相互に争いを解決する新しい道を見出さねばならないことを認識している。力による方法は、正義による方法に変えられねばならないのである。これは、特に軍事的強者、すなわち、弱者に不法を強要するに十分な力を持つ国民に当てはまるのである。

4.2.3 イスラエル占領という現実を生きるキリスト者であるわれわれの選択肢は抵抗することであると主張する。抵抗はキリスト者にとって権利と義務の一つである。しかしそれは愛をその基本原理とする抵抗である。それは敵の人権をも認める人道に沿ったものなので、創造的な抵抗である。敵の顔に神の似姿を見ろということ、不法を止めさせ、犯罪者に攻撃をやめざるをえないようにしむけ、土地と自由と尊厳と独立を取り戻すという望ましい目標を達成するために、積極的な抵抗というこの展望を論拠とするということである。

4.2.4 主キリストは、われわれが見習うべき模範を残された。われわれは悪に抵抗しなければならないが、主が教えられたのはわれわれが悪をもって悪に報いることはできないということである。これは、特に、敵が自ら押しかけると決断し、自分のものであるこの地にわれわれが残る権利を否定する場合には、難しい戒めである。それは難しい戒めではあるが、そのみがわれわれの存在を否定する占領当局の明確な布告、および、かれらが占領を続行するために用いる数々の言い訳という現実には有効なのである。

4.2.5 したがって、占領という悪に対する抵抗は、悪を拒否しそれを正すこのキリスト者の愛と結び付けられる。それは、愛の論理を理解し、また、平和を創り出す全てのエネルギーを生かす方法によって悪に抵抗するのである。われわれは市民的不服従によって抵抗することができる。われわれは死をもって抵抗するのではなく、むしろ生命を尊ぶことを通して抵抗する。われわれは、祖国のためにその生命を捧げた全ての人を尊敬し敬意を表するものである。また、われわれは全ての市民がそれぞれの生命と自由と土地を守る覚悟がなければならないと主張する。

4.2.6 パレスチナ人の市民組織は、国際組織、NGO グループ、また、ある特

定の宗教団体とともに、個人、会社および国に対し、占領者によって製造される全てのものからの資本引き揚げ、および、経済的かつ商業的なボイコットの実施を呼びかけるものである。われわれはこれが平和的な抵抗の原則に沿うものと考ええる。これらのキャンペーンは、報復を目的とするのではなく、現存する悪を止めさせ、不法の実行者と犠牲者のいずれをも解放することを勇気をもって、公然と、真摯に宣言することによって、遂行されるべきである。その目的は、イスラエル政府の異なる極端な立場から両国民を解放し、両者に正義と和解をもたらすことにある。この精神によって、またそれへの献身によって、南アフリカや世界中の他の多くの解放が実現したように、われわれの待望する問題解決に至るであろう。

- 4.3 愛によってわれわれは不法を乗り越え、われわれとその敵対者双方のために新しい社会の基盤を確立するであろう。われわれの未来と彼らの未来は一つである。われわれ双方を滅ぼす暴力の循環が、双方に利益をもたらす平和のいずれかである。われわれはイスラエルに対し、われわれに対する不正義を中止し、テロリズムとの戦いという装いによって占領という事実を歪曲しないよう要請する。『テロリズム』は人間の不法行為と占領という悪を原因として生ずる。もし『テロリズム』を排除しようと真剣に願うのであれば、これらはなくならねばならない。われわれはイスラエル国民に対し、果てしない暴力の相手ではなく平和のパートナーとなるよう呼びかける。占領と内輪の暴力の循環という悪とに対し、ともに抵抗しようではないか。

5. 兄弟、姉妹に向けてのわれわれの言葉

- 5.1 われわれの全てが今、封鎖された道と、苦難以外何の約束もない未来に立ち向かっている。キリストにあるわれらの兄弟姉妹に対するわれわれの言葉は、よりよい未来を目指した希望と忍耐と不変、そして新しい行動の言葉である。われわれの言葉は、キリスト者であるわれわれが携えるメッセージであり、われわれはそのメッセージを、痛みがあろうと、流血があろうと、また日ごとにどのような困難にもかかわらず絶えず携えてゆくつもりである。われわれは、自ら定められる時にわれわれを救済なさる、神に希望を託すのであり。同時に、われわれは神とのみこころに従って建設し、悪に抵抗し、また正義と平和の時の到来を早めるためにたゆまず働くのである。
- 5.2 われわれは、キリスト者である兄弟姉妹に対し、今が悔い改めの時であることを告知する。悔い改めはわれわれを、囚人、傷ついた人々、一時的なあるいは永続的な障害に苦しむ人、子どもらしい暮らしのできない子どもたち、また近

親の死を嘆く人など、苦しむすべての人との愛の交わりに、呼び戻す。愛の交わりは全ての信者に霊によって、また、真実によって次のように語りかける。自分の兄弟が囚人であるならば私も囚人であり、彼の家が破壊されたならば私の家が破壊されたのであり、私の兄弟が殺されたならば私が殺されたということなのだ。われわれはこれと同じ挑戦を受けており、これまでに起こりまたこれからも起ころうとしているあらゆることを共有するのである。個人としても、また教会の代表としても、われわれは不法を非難し苦難を分かちあうべきときに、おそらく、沈黙していた。この土地におけるわれわれの使命を辛抱強く担わず、あるいは、新しいまた統合された展望を考えることも、そのための行動をすることもなく、われわれの証言に逆らい、自分の言葉を弱めてきたゆえの、沈黙と無関心と交わりの欠如を悔い改めるのは今である。時には自らの使命を犠牲にして、もっぱら自分たちの組織にのみ関心を寄せ、聖霊によって教会に与えられた預言的な声を上げることがなかったことを悔い改めるのである。

5.3 われわれは、キリスト者に対し、われわれが国家と政府の転変の続く何世紀にもわたってそうであったように、この試練の時にあっても不動の姿勢を保つよう呼びかけるものである。この同じ試練の時を共に生きるみなさんの兄弟姉妹全ての心を希望で満たすことが出来るよう、忍耐強く、揺るぎなく、溢れる希望をもって生きよう、と。「あなたがたの抱いている希望について説明を要求する人には、いつでも弁明できるように備えていなさい。」(ペトロの手紙 - 3:15)、行動的になろう。またそれが愛を満たすならば、われわれの直面する苦難を克服するための抵抗のゆえに、払わなければならないあらゆる犠牲を分かち合おうではないか。

5.4 われわれの数は少ないが、われわれのメッセージは大きく重要である。われらの地には何にも増して愛が必要である。われわれの愛がイスラム教徒、ユダヤ人、そして世界に向けて送られるメッセージである。

5.4.1 イスラム教徒に対するわれわれのメッセージは、愛の、また共に生きるというメッセージであり、狂信的態度と過激主義を拒否することへの呼びかけである。それはまた、イスラム教徒が型通りの敵でもなければ戯画化されるようなテロリストでもなく、むしろ、平和に生き、対話をするのだという、われわれの世界に対するメッセージである。

5.4.2 われわれのユダヤ人に対するメッセージは以下の通りである。つい最近まで戦闘状態にあり、今もなお争ってはいるが、われわれは今後愛し合い、共に生きることができる。占領が終結し正義が確立されるならば、この愛の論理と力によって、非常に複雑なわれわれの政治活動を組織化することができる。

5.4.3 信仰の言葉は、政治的な活動に従事する誰に対しても、人間は憎しみ合うために創造されたものではない、と告げる。憎しみ合うことも、殺すことも、そして殺されることをも許されない。愛の文化は、他者を受け入れる文化である。それによってわれわれは自らを完成させ、社会の基礎が確立される。

6. 世界の諸教会に対するわれわれの言葉

6.1 世界の諸教会に対するわれわれの言葉は、第一に、皆さんが言葉と行いとわれわれの中に住むことによって示されたわれわれとの連帯に対する感謝の言葉である。それは、パレスチナ人の自決権を支援する多くの諸教会およびキリスト者に対する賞讃の言葉である。それは、法と正義を主張するゆえに苦難を経験してきたキリスト者と諸教会との連帯のメッセージである。

しかし、同時にわれわれは、パレスチナ人に関する不正な政策を支持する原理主義的な神学的立場を再考し、悔い改めるよう呼びかける。それは、よき知らせとしての神のみ言葉を、被抑圧者を殺すための武器とするのではなく、被抑圧者の側に立ってみ言葉を保とうという呼びかけである。神の言葉は神の被創造物全体に対する愛の言葉である。神は争い合う者のいずれかを一方的に味方されることもなければ、対立関係にあるいずれかに一方的に敵対されることもない。神は、全ての者に正義を求め、全ての者に同じ戒めを告知なさり、全てを愛される、全ての者の主なのである。われわれは姉妹教会に対し、われわれが苦しんでいる不法、すなわち、われわれに占領を押しつけるという罪を正当化するような神学的工作に手を貸すことがないよう、要請する。諸教会の兄弟姉妹に対し、「われわれの自由を奪還することが、二つの民族が正義、平和、安全、そして愛を実現するために皆さんのなす唯一の支援の方法なのですが、皆さんにそのような助力をお願いできるでしょうか？」という問いを投げかけるものである。

6.2 われわれは諸教会に対して、われわれの現実を理解するために「来て、見なさい」と訴える。われわれは、皆さんを祈りと平和と愛と和解のメッセージをもたらすためにわれわれを訪れる巡礼者として受け入れ、この地の現実を皆さんにお知らせするというわれわれの役割を担うつもりである。皆さんは、この地のもろもろの事実と民、すなわちパレスチナ人とイスラエル人とを知るようになる。

6.3 われわれは、反ユダヤ主義、反イスラム主義を含め、宗教的であろうと民族的であろうとを問わず、あらゆる形の人種差別を非難し、皆さんに人種差別を非難し、そのあらゆるかたちの表現にも反対するよう呼びかける。同時にわれわれはイスラエルによるパレスチナ人の土地の占領に関して真実を語り、真実の立

場に立つよう呼びかける。前述のように、われわれは全ての人の正義と平和と安全のための非暴力による抵抗の手段として、ボイコットと投資引き揚げ運動が有効と考える。

7 . 国際社会に対するわれわれの言葉

7 . 国際社会に対するわれわれの言葉は、「二重基準」を適用するという原則を停止し、また、当事者全体に関係するパレスチナ問題に関する国際的決議を強調するということである。国際法を恣意的に適用することによって、複雑に入り組んだ法律に対してわれわれを無力のままにしておく恐れがある。

それは、国際社会が力の論理のみを理解するにすぎないという特定の武装グループおよび国家の主張を正当化するのである。それゆえわれわれは、先述のように、イスラエルに対する経済制裁とボイコット運動の開始という、市民団体や宗教団体の提案に応えるよう呼びかける。われわれはこれが、復讐ではなく、むしろパレスチナ人と他のアラブ人地域におけるイスラエルの占領を終わらせ、全ての人の安全と平和を保障する合法的で最終的な平和にいたるための真剣な行動であることを、再度繰り返さずものである。

8 . ユダヤ教、イスラム教指導者へ

8 . 最後に、われわれは、全ての人が神によって造られ、等しく尊厳を与えられているというヴィジョンを共有する、ユダヤ教とイスラム教の宗教的かつ霊的指導者に申し上げる。だからこそ、われわれの義務は被抑圧者と彼らに神が与えられた尊厳を守ることにある。これまで失敗し、われわれに失敗と苦痛の道を歩ませ続けている政治的立場から共に立ち上がる努力をしようではないか。

9 . パレスチナの民とイスラエル人に対する呼びかけ

9 . 1 これは、建設的な対話を確立し、また、現状をそのまま維持することを目的とする終わりのない戦略の連鎖を断ち切るために、神の被造物である互いの中に神のみ顔を認め、恐れや人種の壁を乗り越えようという呼びかけである。われわれは、恐れと安全を口実とする、他者の否定または攻撃による優越性ではなく、平等と分かち合いの上に築かれる、共通のヴィジョンに到達するよう呼びかける。われわれは、愛が実現可能であり、また、相互の信頼が実現可能であることを表明する。したがって、平和は実現可能であり、完全な和解も実現可能である。こうして、正義と安全は全員のために実現されることになる。

- 9.2 教育は重要である。教育プログラムは、争いや敵意、また宗教的狂信主義といった偏見的視点なしに、他者をその人としてあるがままに知る上でわれわれの助けとなるはずである。今日展開されている教育プログラムはこの敵意に毒されている。他者の中に神のみ顔を認め、われわれが互いに愛し合い、平和と安全の内に共存するわれわれの未来の建設を宣言できるような新しい教育を始める時が来ている。
- 9.3 国家を、ユダヤ教であれイスラム教であれ、宗教的な国家にすることは、国家を窒息させ、狭い限界に閉じ込め、ある市民を他の市民に優越させる、差別と排除の国家に変えてしまう。われわれはユダヤ教およびイスラム教の両者に訴える。国家を宗教または多数による支配に基づくのではなく、宗教を尊重するとともに、平等、正義、自由および多元性を尊重するというヴィジョンに基づいた、全市民のための国家にしようではないか、と。
- 9.4 パレスチナの指導者に対して、われわれはこのところ続いている内部分裂は、われわれ全てを弱体化させ苦痛を増す要因であると言明する。どのような内部分裂にも何ら正当な根拠はない。国民の利益が政党の利益に優先するのは当然のことであるが、そのためには分裂を終結させなければならない。われわれは、国際社会に対しこのような団結を支援し、自由に表現されたパレスチナ国民の意志を尊重するよう訴える。
- 9.5 エルサレムはわれわれの展望と生活全体の基礎である。それは神が人類史において特別な重要性を与えた都市である。そこは全ての民が、唯一の神の臨在のもとで友情と愛をもって出会うべく目指して訪れる都市である。預言者イザヤによれば「終わりの日に、主の神殿の山は、山々の頭として堅く立ち、どの峰よりも高くそびえる。国々はこぞってそこに向かい……主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。」(イザヤ2:2-5) 今日この都市には、三つの宗教に属する二つの民族が居住しているが、その政治的解決は全て、このイザヤの預言者としてのヴィジョンとエルサレムの全体性に関わる国際的な決議に基づいて行われなければならない。相互の信頼とこの神の地に新しい地を創設する能力に関する問題を中心とする、問題全体を解決しようとする意欲の源泉なので、このエルサレムの神聖性の認識とその内容とが、最初に話し合うべき議題となるのであるである。

10 . 神への希望と信頼

10 . 全く希望が持てない中で、希望を持つことに対するわれわれの切なる求めを喚起する。われわれは、神と善意と正義とを信じている。われわれは神のみ恵みが、今はまだわれらの地に強固に残る憎しみと死という悪を、最終的には克服なさると信じている。ここに「新しい地」と、それぞれを自分の兄弟姉妹として愛する精神によって復活することができる、「新しい人間」がやがて現れるであろう。

* * * * *

訳者より

小生にとってこの種の翻訳は初めてのことで、当初は覚束ない翻訳であったが、幸い小生の所属する北関東教区・志木聖母教会の牧師が、著作も翻訳も多数こなしておられる輿石勇司祭であり、輿石先生に監修をお願いした。輿石先生は前エルサレム主教のリア・アブ・エル=アサール師の著書「アラブ人でもなくイスラエル人でもなく」の訳者でもあり、パレスチナ問題に対する理解も深いのでこれ以上の適任者はいないであろうという方である。幸い輿石先生の適切な監修、修正と松浦順子さんの助言もいただいて、この翻訳文も見違えるような日本文に生まれ変わることができた。深く感謝している次第である。

本文書によって、われわれの兄弟であるパレスチナ人キリスト者の置かれている困難な立場を理解し、何らかの援助の手を差し伸べることが出来ないかを一緒に考えたいものである。その一助になればと思い身の程をわきまえぬことに手を出してみた次第である。

2010年7月
日本聖公会北関東教区 志木聖母教会信徒
山田 晃二

A MOMENT OF TRUTH

真実の時

苦難のうちにあるパレスチナの人々の

心からの信仰、希望、および愛の言葉

2010年8月発行

発行：日本聖公会東京教区エルサレム教区協働委員会

発行責任者：司祭 神崎雄二